

中国の測位衛星パワー 衛星による測位と量子暗号配送で米国を凌駕



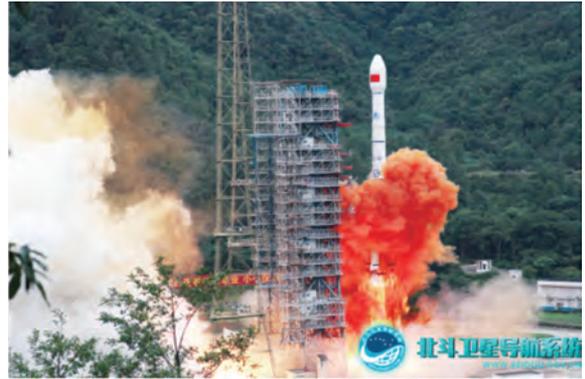
神谷直亮
Kamiya Naoakira
衛星システム総研 代表
日本衛星ビジネス協会 理事

どの国どの陣営も、宇宙ニューメディアのR&Dを怠ると簡単に追い抜かれてしまう。とくに、中国・北朝鮮などの異質な国情の勢力のR&Dレベルを低く見がちだ。今回は中国と少しばかりだが北朝鮮の測位・観測衛星のパワーを中心に見ていきたい。宇宙ニューメディアではロシアの事情も無視できないが、紙幅の関係で別稿に譲りたい。(編集部)

測位衛星の威力に目覚めた中国

中国が宇宙ニューメディアに強い関心を抱くようになり、独自の開発に突き進んだきっかけについてはいろいろな説があるが、筆者のファイルには2つのメモが残っている。

1つは、1991年の湾岸戦争でアメリカ軍がGPSを駆使して精密な攻撃を繰り返したのを目の当たりにして、1994年から「BeiDou(北斗)」測位衛星システムの独自開発を進



中国は、2020年6月に歴代55機目となる第3世代衛星を打ち上げて「北斗測位衛星システム」を完成した(出典:en.beidou.gov.cn)

めた。その後2012年末には、アジア太平洋地域でサービスを開始し、2018年末にはグローバルなサービスに発展させている。この記念すべき2018年には、チュニジアのチュニスに海外運用拠点を設置して意表を突く戦術を取った。さらに2020年6月には、実証試験衛星、第1世代、第2世代を経て、55機目となる第3世代衛星を打ち上げて「北斗測位衛星システムが完成した」との発表を大々的に行っている。

驚くことにこの中国の測位システムは、今やアメリカのGPSを超えていると言って良い。理由は、運用衛星数が45機でGPS(MEOで30機)より多い上にMEOのみならずGEOとIGSOの3軌道を駆使して全地球をくまなくカバーするサービスを行っている。

ニクソン訪中の裏にGPSあり

もう1つのきっかけは1971年に遡るが、ニクソンに先んじて北京に乗り込んだキッシンジャー大統領補佐官(当時)が手土産として持参した衛星画像であった。この数枚の画像については、石原慎太郎著『天才』(2016年、幻冬舎発行)で紹介されているのでご存じの読者が多いと思うが、日中国交回復という外交問題に取り組んだ田中角栄元首相が抱いた「なぜ中国が激しく



「天宮2号」は宇宙科学ラボ(出典:pleple.com.cn)